

0 1 2 3 4 5

6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

JAPAN

吉本抄

丁

25
4427
2



4427
2

去來抄 中

同門評



往あらゆ柳のさゝれまひか 芭蕉

浪化集みさる柳とせり色、弔う涙はるなりかくも
史邦小文庫み柳のさゝれむ汝かす支考曰さゝれ柳なういそ
汝汝や去來曰さゝれ柳とそいに支考曰柳のまひはそれ
も柳の涙る如くと比論せらるまほへ去來曰土へに柳の墨に
さゝりてふなりさはる柳とどもあ搖ふまえ候る故
がまみてそゝ語をうす支考曰吾子の號ハリるより

品降る桺と多「」丈竹曰翫の多きあくた趣向
支考りいと加くもじま來曰亦ふのあさうとすらむ
口惜一比諭み一てき難くもいそんあみさんれとは
いそくゑ一ま格位も又多別なりと論は許六日
先師の經尺よさほる桺とありまと桺のさしもとハ首
切せなり去來曰多切のすりハテト聞ふよ黒之今論に
おずそん先師の文の桺のさしもとはあり許六日先師
あどよりち一絆す句多一真跡も難とくとくとなり
ふ子皆く降る桺の絆なり後質行判へたす
去來曰いと多故やありさん義お句ハ汝の語一を多
く

くよがほすくよがほ江齋より半竹餘す後大切の桺一草去来
ワタニ立木とを支考も詩をよまぬとも後接あ集うも
降れ多て演化集機の半よ先師迂化ありトハ此をめ
むかしく珍ん事と恨て入集うをあるせむ

雪れ日小免乃皮の聲つゝき芭蕉

魯町曰此句意いと去來曰あよみよらもと遊びてと
あらぐよともア業と思ひ一と清て理会す一と
様斧と鎗破一て知一先師は句と詔詔方に予
基盛郊す先師曰是と悦ぶ者越人ヒ汝のうも
うじと思ひにくめてすりと詔の機縛

なり一世人或云雪ハ越後免の像ニ似たり或云免の皮の弊体ハ雪中の毛も少くなり乍らく理屈をつけて見る所也後いへがのとく解さハ思ふ日に猿つゝ弊とてやーううの弊なるべくある

山宿未てゆすゆす一莖叶芭蕉

湖春曰莖ハ山より生れ芭蕉俳諧巧なりとも欣學なまの過なり去来曰山宿すまかと詠る燈歌手一湖春も地下の歌道者なりいそがハ旅へらむんとたか川づれ

笠提す墓をふくらや林村北枝

先師乃墓ニ詣て詩句也許六日是ハ既すりソ包ニ身に疑有てやどきいぢん去來曰やハ治定嘆息のやニ事は人を訪ふよき笠を持て門戸みて是ハ思ひ外ニ墓哉めぐらすもとへれど也凡蓋々ハ一念能む三三一笠持て門よ進入るやといふ旋なく外人の事なる一春乃跡とた第一のしや稚子の聲 寺戒
そしやま風や度せにすみ稚子の聲なり去來三うてあるてかわきあらり合てやまく度きをもとく一つまとひさんやまたん丈廿曰廣の字行いや一萬の序トすむ去來公賜す

馬の耳すやうてまゝ 韶子の花 支考

玉来曰馬の耳すやうてまゝ とを我まいそん御まよを
トヨウセイシ一すめなり支考曰何のこゝま車うきん
吉子の如くからり一もんにいふすまもアモ難き
よりなげし輪す曲翠曰ニ子互よえてもまと易ど
ぬまく本を難トす其篇ともにをなり申シモ西作
キモモ一もんもひ下さんハがくまー玉来曰翠亦
えくれど故なりん諭りを我うむるまとやしま
はよえどもまち學ひ次オにすみかんたのル終に
岭々不ふなうして化の傍ヨリヨリやすすハ仄と

キテテテテにあくくく

白水のなぐれもをよ處葉少木尊

喜角曰もハよづつあるお顔なり玉来曰角ハうしき又ま
じぢもてよや是ホキカモなまく一そきハキサセ

トシテシテ上月毛の約のお嘴くちアモ 許六

玉来曰予此趣向ありき匂き有明の花ふ衆込とひて
月毛騎羊毛馬とく詞つまくの文字とへいそに
をすりと駿馬を推すに紅梅錆月毛川原毛あと
おもひめくとを庵せまく一うち後許六句とて
予才と美すうに畠山た朱門佐といへと大名のうじ

山富佐をもつとも一まとくにちの名なりえ所曰
もとみすん、吉頭よ千轉せよもあらもせま
起さんにあまくとも、鹿の足 杜若
乾鞋とゆくりや浦は、雪也
ういすのゆてるもなうくろ 仁多
未來曰伊賀の連元もあらをもあらあり是列先師の一軒と
辻化の後すくえ、かのうくの類なりそ思なれ
よきええ、支考曰伊賀ねうはせるともまたと
いやふ、伊賀の連元も上手なり

雪の古はまくや花乃あ
早發

ま來曰。まほんやといひ風情わ。參りとひてき
らむなる事。一。てやのえを千金なり。羊殘ハ、矣。もく。
考セ丈叶曰。やとり。あく。り。上手のこま。一。とんう。
す。り。ひ。す。ね。お。と。さ。う。き。ま。す。れ。か。ち。か。其。角。
そ。の。岩。よ。す。り。く。み。ち。る。つ。れ。素。行。
ま來曰。角。う。句。を。暮。春。の。乱。墨。也。初。墨。も。弱。と。遙。す。曲。奇。
杯。の。字。も。く。ひ。う。一。行。う。句。ハ。ゆ。掌。の。姿。も。く。人。岩。う。す。う。も。も。
あ。が。よ。怖。れ。て。な。あ。う。も。す。く。或。ハ。錦。拾。は。又。き。こ。よ。う。
う。し。う。は。う。ひ。う。も。す。く。ま。あ。う。り。凡。あ。が。と。れ。ま。か。う。も。も。

まな情とえすすむ一一角う功者すゝ時よりて過て

すまへ初學の人情ますんハあく

相の本筋聞かずもぬ爲事す
凡相

芳角曰是先師の権の本筋等類なり北曰あく
詞づきの似るがゆきうらたみかはりと去来日
テテル心のがみもあさみけあるもとくノ草とうと
滝川の底下りめく養いと言ひていまう手相
まくと兄より生れ猪さんハ又名ふたり

駒宮に出逢ふ野毛の事
野明

左來曰約束ふ人の出逢すとおせきの落とスハ生ま
風情よ野哨曰居つとなり去来曰あくめりさハセ
セレヒと昔子供歌詣の行上達せんとも思ハマリ一板
をねどろき入侍の支考曰匂れ秀拙ハともうも
殊有才藻とあく向すて不審也と空吟す予ひん
教るる年ありて通せんとせ先師女日ぞくり旅
は伏せしより後群上をせり常は朋友なく修り
むす、をはも先師とくめ大叶支考ちとれす
今吟じて外の功業をねねねねねねねねねねね
句もかえり誠ニも無ともも一呂平生にま

弱々と雖
も

あゝ一山様のつゝく栗の毎
トカチ

行發乙卯日若以身為家

正秀曰嵐山を少年の句よりあくまで晴れありをば
無功のへきるを少年の句とひくまふ曰
二日とくしぬとくとくあり化家の候よまむ——

あめのんあさよけアシモ 越人

其角許六ともに云ひ句、いひゆゑ、故ニ僧ニ別る

ひむはせうかあとも
してねえまわ

電のうきすせりてより 関後 うち 去來

太州支那ともす曰下のみ文字過り田てやと
有て一去來曰御とを一々へたま多義なりあ士曰最
句よりておとと論すも後丈州は語て曰退て思て
あすを電の向とくはくちん只電の後お閣の向也
故よれときやゆる丈州曰さうりうそせりたひく候凡
ほとくあんぬ帆裏みなみや夕うちれ先放
をしめがやと日石浮といつて波を集みあふわせ
可南曰いきなま故や去來曰時を帆裏みなみやとく

さて景情たゞ可い／＼と明不ほどもむるハシラウル
ホトトギスんう可南曰同集ニ外セラフミ親モ相石ニイ
カリ侍や去來日夕セテ難向ハ趣向セニツツトクカモヒテ
出するあがみあへん又下意とおせし似あるとモニ格子なり

トノ作を名もあらまんがま 納 支 梅

許六日是と詮經をゆく云實さん考テをなづりタリお整セ
又曰人あり語上とモ人ニあひてよへやり一トトヘやり一ト
と名と云ふアトノ事多モアリ矣去來日よへやり奉
トノ事と上と較ひてトと決一トノ事急語路不通なり
又疑ひて決ちとてりて事多モアリはおま納ハよん

難のありてトとぞのトナモトナモトナモトナモトナモト
ニカヨニ許六日あもうちよとモトモトモトモトモトモト
アーチ也

鞍壺よか序をかくや大根引 芭蕉

風圓曰此句いゝなまよ面本き去來日吾子いづ解
タムノ只圖一そきかは一トしたゞ一花と圖ナシトナ
奇山幽谷靈社古寺禁闇よりハモ多ヨクノトキ
タリ急み言葉多一物のとくの難い墨のあしよ
みをあしは殊レシトナモトモトモトモトモトモト
てかくらこおさくのあがみじ是おハモトヨ

國のあへまどを用ひらんを今解へく本情の便ある
國あへそ是と畫とも一てもよしむ匂とも一も
ようしんさんと大根引の傍み草とも馬の首うち
さげとも轡つやふい坊主のちうづうりと毛ふくら國
かゆくも古うじんやねくもやゑーんくーー
國り兄何某却て國よりも感動すくハ佩游放
志アモトイテも畫とよこすく放也巫師尚景
子なり

タケルを鐘とうじや寺乃秋 風國

此々えーみき吹鐘のさくくくくくくくくくくくく

風玉曰せ山寺は晚鐘をきくに曾てさくくく
信て仙を去來曰是殺風景也山寺とひ秋のゆく風
とひの晚鐘とひ扇とひの頂上なりあされば
一端游興驛動の内を聞さくくくはとふを一己の
私なり風玉曰此時は情あくも心のとくはも他せんと
まくふや去來曰是情あくも心のとくはも他せんと
まくふ句ふぞせり勿論句舊にまことても車をば
えすすきまし

應くとひて敲くや雪のいに去來

大叶曰此句不易うてありのちゆとひ

支考曰いとくしてかあきと解よりハ入るや正秀曰ち
先師のすねを取れと恨みて曲翠曰句の苦惡といふ
當時仙せん人と多くいといへて甚角曰まの雪の門也
許六日を佳句也いま十分をもん露川曰み丈す妙之
去來曰人への評亦たのくまはより出つ此句も
先師迂化八多の句なりもん同門の人も雖も
たものと云ハ自代ともに此境す

家年のみ蟄や神の光を　去來

大宰府奉終の句なり許六日茂句小切字ニツ周も
法ありは句がまニツの義あり去來曰平多モ切字ニツ周も

うろがくとくのまでもうしとひ家を原ハ

ふふや戸板ねき山乃中　胎童

去來曰皆知和学の立葉あくと句平多もり詰詰常
情ゆきりなく事をく一墨面時流り乃ち
や也世上の句おほくハ免す故ニ角立トアヒト句中
よあくわい或ハ圓あと立とすんじゆか作ふとあく
一燕暖簾の下をもるむむをりぬ兒げ下代ありも
うよ附ふ字いそくりの使者よう至りし才一つまる心
中よ理高なに故なりも一画功のか某くよおどんで
又いそくりかをむじふもあくもん怖

さへ きや 月 く見ゆる 猿の般 木尊
許六日サ句ハ入麻カホトヒおくる秋のよ風ヒテモシニ
去来曰吹送カ吹送を終麻カ山の屏る多モモシニ至
クルモ鹿一丸タマノリ さばいつて運意多列なりタマノリ
タマノリ

吉泰ヨウケヨリ 影ヤミタク 洒堂

洒堂曰路通いテハ季泰を累モも得タマスノ一斐句と
ナリクセキセ去來曰路通いテ句詩花宴をモア
ナシ故也は句を折乃葉葉子火絶のあらむ妙う龜泰と
勝タマスセ一句アタマタマリモ葉葉子ハ原泰とも累得モ

墨奈タマタマリモ葉葉子父立ト 早泉

吉泰ヨウケヨリ用タマスノハ一句の夜之良ハ東泰ヨリ車
シテシテ勤ケセ仰の句也花ハシタモ有アモ内雅名セ機用ミ
墨奈タマタマリモ葉葉子父立ト 早泉
吉泰ヨウケヨリ生タマタマリ父立妻ト 早泉
吉泰ヨウケヨリ送葬ト 仰の去來曰然ハシト 早泉代人の句也
墨賢佛神カ境カモ遊シタマタ禁裏仙洞カ
シハモアヘー乞食素門のよすもねよア一句に
カヘテルハ月光と出アヘニ身外を吟せハアヘニ
喜ト取リ侍しん

序余・猪ややまめまみを評ひ五凡 許六

去來曰七字引ひくさんハいは是とあさハ一句もどう
か事のん許六曰ちきりハ自然の事求て他すうは是に
七字とひて考りとひる也其角もまことど評一等

門口や牛王らしくて初ノノ

心ちゑ知

去來ヨ此々を根よりアセシムと其角り能はれの
門れつうと多れと評す予・本誤なりもんハツー
似たるすもけハくくく 嘘ひ除て一句ニ燕併とキテ
門とひれとすとモ多めの評となせりハトアルノ

猪の鼻をつうす 西丸 や 邑七

去來曰ナセムアリモ――四分の包なり正秀曰猪をば
アリ鼻をくすつう――とんとくほひのりも後先作も
一興ありし乍り去來曰退て思ふ所此に上方ニハ
西丸 や――西勇もさだよより猪をば
――風情すがせり平ハ西圓もよしも西丸も
自古多のとくさむとくもともだまくそりくじもそろてこも
ゆきりうりあて人の向をまことにぶりもよし場トトマノ
まよ場といたりひすア 壴の響とまで退くも
くのけとなり――といふ教也

慢めて人と戻よやすまく 真角

詩六ヨ是を謎とひす也去來曰是ハなまくもせよ
ハセキモ句せたゞと撫爐て人と房トノヒテシ
キヨ提爐もてたゞモトセニキスンチモゼンヤトシ
人トたゞモトシモトシモヒトリ合兵トシイツモ走
むク一聞一句とシホアリシキ句お切リ核取ハテシモ
このあやとモテすく句せぬを多難モホトモ

あさうほん筆風毛

魯町曰其句或人の言矣也ハク去來曰其後句とシモ走化
杜年曰先師の筆ニホミヘシハ男也とハシタモ不ニ秀才
ありや去來曰先師の句モト南う蓼うつ葉とヒムモ抱き

行くも句の否也句上モナナカノ答ニホニ顛あり風毛モシ
シ後表裏一の又ナツモアシモリのトモウハロトシテナリ
ナリモナリシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ
魯町別露の句とシホシテ襟うそとシホシテ胸うそとシホ
栗の頸とシホシテ前喉てぶ根のかすりや山島と十題十句
言下ノ賦一ノリ失之シシトシトシトシトシトシトシトシトシ
さんトリソ魯町別砧の題とかす娘より嫁のちよよ
砧シホ掛の賦とシホシホシホシホシホシホシホシホシ
とねすエハ集門まづオのちありてすく行つてシ召
集ももひる先師の句もひも合ひのすあうと知るト

云來曰古時世間の化者翁の舞の句あるを有はての
本檜なよの句仰ますよひあまま／＼トウミツガ／＼芭蕉流
よむをえんれ族おか／＼車ふきせんふうれと
記すもけ也

年 ちやあ中のれき月夜 其色
元日 や 土つゝくのれ故もせん
去來

許六曰 菖蒲元日とりて冠用するを経あり 来年ヨ
元日ハ薦^レトム云わんにやの字を懐みまくは
け難なるトトヒタ元日といふ外ナリやハ嘗^シ義
ノ御也 許六曰 廿角は匂を吟一まうえもいと歳旦に

やくは元日ハひ吉ひと覗く先師曰さくらむ
化者の名曰元日といふんハねくも一歳を年をやまとを
重んじて又やの字よ嘆貴のやどりハなづ五つ也
やハ疑のやとも習修も去來曰甚角々句よたいて、
先師かくのまよへて一弔う句にわいてもさひたま
ハハ化者乃甲乙ともてもよもあくに已くもきす
ふよ遠あり乎ハ殊れ新洞ともて事よ才ニ多き
を経るそこハ先師も能くもよほへ又嘆義
やハ名同よも名目と以ていふ治定りやニ治定
も嘆息嘆義あり世話みもももアリや袁山亦切

やむさへ坊などり、皆治定嘆義也と論すれ後質
列一 終一

風國曰志根の箇句一匁ふ季節を二つ入るも可せより
取すふや去來曰一匁ふ季節ニニ五とも経なるて
もとより好じ事みもあらず

許六曰一句ふ季節を二つ用ひず初公のなりて紀事也
季と季のがよふもあり去來曰一句ふ季節を二つ用ひず
ハ功者初元より月ノ終始と許六の季の通じまに
習ありといつて予りいたる紀事也

盲より亞乃ういゆふ月見の事 去來

去來曰サウハナセハ年ちの匁たりシハ先師より受
サルヘ世とももあくわヨリ匁セを事新一
或ユーノヒ一とも匁位と論そくに至てハ甚下品也坐
蕉門の俳友中サ妹ふをこそおひ或連歌師の曰
花のもとにてけ匁の評あり俳諧もがる感情の匁ある
あもつりく一トナリ是を賣せし所と云フハ久松の
連歌師ハラシモトスレヒたもひ侍る

牽牛花の事と見えり風の歎 許六

一説は匁先吟の萬の葉の面見えりと云れたりと
許六曰等類よりて云せざりと云ひ刻のものも云及

趣向がハレ去來曰等類とハシムト同巢の句なるト
たゞそ和哥は花さうな常盤の山の芋ハたのれ候てや
もとをかんともにあませぬ常盤のふの小男麻ハたのれ
をきてや秋をまくしともうみてもうめうもくじよ
俳諧みまきあるとき事也

志くゆや紅の小袖と吹き去來

正秀乃曰いとんづくもせもくなくにの數玉と云來一生の
句唇也去來曰正秀も評はず解りぬを予へ石
生くもて来る扇の路上よみの小袖吹き一しむ
け一ときハ紅葉のねろす山おろしの風と詠す

アの俳諧なまくと化してゆき

そりのぬりこに丁とおも

生艶のひらくすると産よのせ

とへりやくらんとく

去來曰は附句臺のせといふいのとの税役と極て
はるゝてりやうりひらくとてともひうなうあり
まほくちくと次の附句までもうひがふそく
お供まくならざり想て一匁にひそ一もハモとく
甘くともおなり

梅の花赤いもくあひうも 惟然

古来曰惟然坊々今の風太ふ乞水の教なり業句す
あくま先師近化の歳の夏惟然坊々謡諧と導達事
まじき口貨のまづりすみて隱源よさざりくと
浪じらて或ハ枚のみすくと風の吹ワリなど
ふを賣一珍ふ又俳諧を氣裕みて多引列る化す
「一」のまひ亦は後いよく風作うろくんなど
あくま車と同あよひあくまみりにて自の集の
哥仙三作の妻よ姫子あくまくとくの雪み匂ふとくに
先師評「終へる句勢句姿などいふよねううた、
みな／＼志却せ／＼か／＼見え／＼

行ひて見立湖鳥坂の音をす 素堂

なき人の小袖もいすや土用か一 芭蕉
素堂の匂ハ深川芭蕉菴またくほす句なり先師の
匂を予ク妹クオアクアムヒ英法の国うち芭野ふくち
ともにすすり成いどもむちゆふ本しきにあむ集と
又ふ先師の事ともおう／＼まく／＼よ素堂の
匂をあけり物のたずやみあるし、成もて名人喜べと言
らねばりそれともて名人ういづちせんらぬ先師の
匂もかくのう一皆人のあくまくせうしのとあ／＼
世話よも人幸いともあらわけといへり一氣のまつ通

自然の妙應があるものあるもあらず——誠よ痴人
面前更を脱へるすとより

梅白——きわや鶴と盜あり芭蕉

去來曰言集集よけ句とあけて先師の事とおぞくは句
をつづりといひ是がハねのうろと弁へべて評せり
秋風ハ洛陽の富家よ生んで市中をま山家よ閑居して
詩歌とたの——と駢人と愛すと閑すうは定づらき
更にかれと風流の隠逸人ともいはる文雅あ——
いきありとも後折れとも行はりにそやば評然
見えふうれり傳誦をもとづ知れ也

芭蕉

アリスの海而てなく湧ナの浦 知七

まもとくめ仙せり野坡曰もとくへよりやど
の文字よくじ去來も是ふ同一の字大叶曰かト
ひて風情ハウトナムモトソムキヨモ

トト也

